

『躬恒集』注釈（十四）

平沢竜介・嶋田陽子・玉木紗也香・
中井瑞葉・福地治子・渡辺優子

754 恋こひするにわびしきことをくらぶるに夏なつと冬ふゆとはいづれくろぬしまされり

【他出文献】

ナシ

【通釈】

左

恋をする時に辛いことを比べると、夏と冬ではどちらが勝っているのか。

くろぬし

【類歌・参考】

(題しらず)

(よみ人しらず)

世中にしのぶるこひのわびしきはあひてのちのあはぬなりけり

(後撰和歌集・卷九・恋一・五六四)

題しらず

よみ人しらず

身にこひのあまりにしかばしのぶれど人のしるらん事ぞわびしき

(拾遺和歌集・卷十二・恋二・七三八)

(題不知)

貫之

夢をみてかひなきことのわびしきはさむるうつつの恋にぞ有りける (新千載和歌集・卷十二・恋二・一一五三)

右

とよぬし

755

なきながす^{なみだ}涙も袖^{そで}にそほち^ほつつ干^ほせどかわかぬ^{ふゆ}冬はまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○そぼちつ—ずっと降り注いで。

【通釈】

右

とよぬし

泣いて流す涙もずっと袖に降り注ぎ、干しても乾かない冬は勝っている。

【類歌・参考】

題しらず

よみ人しらず

わが思ふ人は草葉のつゆなれやかくれば袖のまづそほつらむ

(拾遺和歌集・卷十二・恋二・七六一)

三条左大臣殿にて、春夜雨のうちに梅のはなを見る、といふことを

にほふなるはなのしづくにそほつ共つゆなれにたるそてにうつさん

(道信集 I・六二)

きえぬるとききはそほつるわかそてのいかにをきつるつゆのしけさそ

(朝光集・一九)

756 左
いとどしく暑あつかはしきに恋こひにさへ身みのみ焦こがるる夏なつはまされり
くろぬし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○いとどしく―一層ひどく。いよいよ甚だしく。○暑かはしき―暑くるしい。

【通釈】

左

いよいよひどく暑苦しいのに、その上恋のせいでこの身だけが思い焦がれる夏は勝っている。

くろぬし

【類歌・参考】

題しらず

(伊勢)

身のうきをしればはしたになりぬべみおもひはむねのこがれのみする(後撰和歌集・卷十八・雑四・二二七五)

実行卿家歌合に恋の心をよめる

源俊頼朝臣

いとなく恋にこがるわが身よりたつやあさまのけぶりなるらん

(金葉和歌集二度本・卷七・恋上・三九九)

をんなのもとにつかはす、なつ

なつあつみこがる、むねのおもひかなあふきのかせも、えやまさらん

(匡房I・二三八)

終夏

なか／＼と思くらせとなつのひのあつかはしきは我身なりけり

(相模I・二四七)

右

757 消えかへりものおもふ宿やどにいとどしく雪ゆきのふりつむ冬ふゆはまされり

とよぬし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○消えかへり―「すっかり雪が消え」の意と、「すっかり心が消え入り」の意を掛ける。「消えかへり」と「雪」は縁語。

【通釈】

右

とよぬし

心が消え入りそうな程、物思いをする宿にいよいよますます雪が降り積もる冬は勝っている。

【類歌・参考】

（月を見て）

ふかやぶ

きえかへり物思ふ秋の衣こそ涙の河の紅葉なりけれ

（後撰和歌集・卷六・秋中・三三三）

入道撰政九月ばかりのことにやよがれしてはべりけるとめてふみおこせてはべりけるかへりにつかはし

ける

大納言道綱母

きえかへりつゆもまだひぬそでのうへにけさはしぐるるそらもわりなし

（後拾遺和歌集・卷十三・恋三・七〇〇）

女の許に、ものをだにいはむとてまかれりけるに、むなしくかへりて、あしたに

左大将朝光

きえかへりあるかなきかのわが身かなうらみてかへるみちしばの露（新古今和歌集・卷十三・恋三・二一八八）

左

758

恋^こひわびてうちなく空^{そら}に蟬^{せみ}の聲^{こゑ}しらべあはする夏^{なつ}はまされり

くろぬし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○恋ひわびて―恋に思い悩んで。○空―「天空」の意と「心、気持」の意を掛ける。○しらべあはする―調子を合わせる。

【通釈】

左

恋に悩んで泣く心に、蝉の声が空に調子を合わせて鳴く夏は勝っている。

くろぬし

【類歌・参考】

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原としゆきの朝臣

恋ひわびて打ちぬる中に行きかよふ夢のただちはうつつならなむ

(古今和歌集・卷十二・恋二・五五八)

つれなく侍りける人に

ただみね

こひわびてしぬてふことはまだなきを世のためしにもなりぬべきかな (後選和歌集・卷十四・恋六・一〇三六)

(題しらず)

源経基

あはれとしきみだにいはいはばこひわびてしなんいのちもをしからなくに (拾遺和歌集・卷十一・恋一・六八六)

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ともりの

蝉のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば (古今和歌集・卷十四・恋四・七二五)

右

759 さむき夜よにうすき衣ころもをかへしつ つ寝ねれど寝ねられぬ冬ふゆはまされり

とよぬし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○衣をかへしつ つー衣を裏返して（恋しい人を夢で見たいと思う）。

【通釈】

右

寒い夜に薄い衣を裏返して恋しい人を夢で見たいと思いつつ、寝ても寝られない冬は勝っている。

とよぬし

【類歌・参考】

（題知らず）

いとせめてこひしき時はむば玉のよるの衣を返してぞきる

（小野小町）

（古今和歌集・卷十一・恋一・五五四）

題しらず

よみ人も

白露のおきてあひ見ぬ事よりはきぬ返しつつねなんとぞ思ふ

(後撰和歌集・卷十二・恋四・八二六)

(だいしらず)

凡河内躬恒

はつかりの羽かぜせずしくなるなへにたれか旅ねの衣かへさぬ

(新古今和歌集・卷五・秋下・四九九)

760

左 くらぬし

永^{なが}き日^ひを思^{おも}ひく^くらして虫^{むし}の音^ねを夜^{よる}はなきあかす夏^{なつ}はまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○思ひく^くらして―「思ひ暮^くらして」に「蛸」を掛ける。「蛸」と「虫」は縁語。○なきあかす―「虫が鳴きあかす」と「人が泣きあかす」の意を掛ける。

【通釈】

左

くろぬし

長い昼間を物思いして暮らし、夜は一晩中鳴き続ける虫の音を聞いて泣きあかす夏は勝っている。

【類歌・参考】

百首御歌に

後鳥羽院御歌

はしだてのくらはしがはにかるくさのながき日ぐらしすむころかな
(続古今和歌集・卷三・夏・二七四)

正治百首歌の中に

後京極摂政前太政大臣

わざもこが宿のさゆりの花かづらながき日ぐらしかけてすま
(新後拾遺和歌集・卷三・夏・二五三)

(題しらず)

僧正へんぜう

今こむといひてわかれし朝より思ひくらしのねをのみぞなく
(古今和歌集・卷十五・恋五・七七二)

761 右
草も木もおもひもともにかれゆきて時雨に濡るる冬はまされり
とよぬし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○かれゆきて―「枯れ」と「離れ」を掛ける。

【通釈】

右

草も木も枯れ、思いもともに離れていき、時雨に濡れる冬は勝っている。

とよぬし

【類歌・参考】

冬の歌としてよめる

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば

(古今和歌集・卷六・冬・三二五)

物へまかりける人をまちてしはすのつごもりによめる みつね

わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

(古今和歌集・卷六・冬・三三八)

返し

在原業平朝臣

あき萩を色どる風は吹きぬとも心はかれじ草ばならねば

(後撰和歌集・卷五・秋上・二二四)

左

くろぬし

762

草も木もおもひもしげくなりゆきて露にそぼつる夏はまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○露―涙を暗示する。○そぼつる―濡れる。

【通釈】

左

くろぬし

草も木も生い茂り露に濡れ、思いもますます募って涙に濡れる夏は勝っている。

【類歌・参考】

(題しらず)

(よみ人しらず)

なきわたるかりの涙やおちつらむ物思ふやどの萩のうへのつゆ

(古今和歌集・卷四・秋上・二二二)

(題しらず)

(読人しらず)

ゆふさればいとどひがたきわがそでに秋のつゆさへおきそはりつつ

(古今和歌集・卷十一・恋一・五四五)

(題しらず)

よみ人しらず

風さむみなく秋虫の涙こそくさば色どるつゆとおくらめ

(後撰和歌集・卷五・秋上・二六三)

(寛平御時きさいの宮の歌合歌)

(よみびとしらず)

夏草のしげきおもひはかやり火のしたにのみこそもえわたりけれ

(新勅撰和歌集・卷十二・恋二・七〇九)

寄杜恋を

前大納言経長女

とにかくにしげき思ひのたくひかなしのだの杜の秋の夕露

(統後拾遺和歌集・卷十二・恋二・七七五)

右

とよぬし

763

人は来^{ひと}ず^こ氷^{こほり}に宿^{やど}は閉^とぢられて燠^{おきび}火にもゆる冬^{ふゆ}はまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○閉ぢられてー閉じこめられて。○もゆるー「燠火が燃える」と「心が燃える」の意を掛ける。

【通釈】

右

とよぬし

人は訪ねて来ず、宿は氷に閉じこめられて、燠火のように心を燃やす冬は勝っている。

【類歌・参考】

(題しらず)

小野小町

人にはあはむ月のなきには思ひおきてむねはしり火に心やけをり

(古今和歌集・卷十九・雑体・一〇三〇)

おきのぬ、みやこじま

をののこまち

おきのゐて身をやくよりもかなしきは宮こしまべのわかれなりけり

(古今和歌集・墨滅歌・一一〇四)

(題しらず)

(読人しらず)

かがり火の影となる身のわびしきは流れてしたにもゆるなりけり

(古今和歌集・卷十一・恋一・五三〇)

(題しらず)

(読人しらず)

あけたてば蟬のをりはへなきくらしよるはほたるのもえこそわたれ

(古今和歌集・卷十一・恋一・五四三)

764

いつもいつもいかでか恋のやすからむ深き心ぞわびしさは増す

みつね判す

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○いかでか恋のやすからむーどうして恋で心が穏やかなことがあるか（ありはしない）。

【通釈】

みつね判す

いつもいつもどうして恋で心が穏やかなことがあるか（ありはしない）。深い気持ちほどわびしさが増すことだ。

【類歌・参考】

大納言ふぢはらのくにつねの朝臣の宰相より中納言になりける時、そめぬうへのきぬあやをおくるととよめる

近院右のおほいまうちぎみ

色なしと人や見るらむ昔よりふかき心にそめてしものを

(古今和歌集・卷十七・雑上・八六九)

齋宮女御まゐり侍りけるに、いかなることかありけむ 天曆御歌

みづのうへのはかなきかずもおもほえずふかき心しそこにとまれば(新古今和歌集・卷十五・恋五・二四二一)

百首歌たてまつりし時

徽安門院一条

さすがいかに人のおもはばやすからんつつむがうへの夢のあふせも(風雅和歌集・卷十一・恋二・二〇二七)

(百首歌たてまつりし時、恋歌)

進子内親王

思ひやるねざめもいかがやすからんたのめしよはのあらぬちぎりは(風雅和歌集・卷十一・恋二・二〇七四)

左

765

世よの中なかにわびしきことをくらぶるに思おもふと恋こひといづれまされり

くろぬし

【他出文献】

ナシ

【通釈】

左

くろぬし

世の中でわびしいことを比べると、思うことと恋とどちらが勝っているのか。

【類歌・参考】

逐日増恋といへるころをよませ給うける

院御製

こひわたるけふの涙にくらぶればきのふの袖はぬれしものは

(千載和歌集・卷十二・恋二・七七)

題しらず

忠岑

わび人の心のうちをくらぶるにふじの山とやしたこがれける

(続後撰和歌集・卷十二・恋二・七七四)

(恋歌の中に)

大納言師氏

歎きつつかたしく袖のくらぶれば清見が関の浪はものかは

(新続古今和歌集・卷十一・恋一・二一三〇)

右

とよぬし

766

をりふしにいひしことのみ忘^{わす}られであひみぬほどの恋^{こひ}はまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○をりふし―その時々。

【通釈】

右

とよぬし

その時々と言った言葉だけが忘れられなくて、逢わない時の恋は勝っている。

【類歌・参考】

(題しらず)

いなば

あひ見ぬもうきもわが身のから衣思ひしらずもとくるひもかな

(古今和歌集・卷十五・恋五・八〇八)

題しらず

よみ人しらず

よそながらあひ見ぬほどにこひしなば何にかへたるいのちとかいはむ

(拾遺和歌集・卷十一・恋一・六五五)

(題しらず)

(伊勢)

思ひきやあひ見ぬほどの年月をかぞふばかりにならん物とは

(拾遺和歌集・卷十四・恋四・九〇七)

百首歌たてまつりける時

大炊御門右大臣

つくづくとおつるなみだのかずしらずあひ見ぬよはのつもりぬるかな(新勅撰和歌集・卷十五・恋五・九九六)